

雪のふる道、羽州の民家のさまをいへる條に、雪の降そふにつけて、こもりをれば、つれづれもせむかたなきまゝ、見なる、ものを忍にかきてなぐさむ云々、大路をたづさふるともし火は、まろくひらなる板に、ほそき木をふたつたてざまにつくり、それにまたひとつ横につくりそへてさげありくたよりよし、おほひをば籠にて造り、紙をはりてもてありくなり。

〔骨董集 上編 下後〕ぎよなうのちやうちんの再考

先板の卷に、秋の夜長物語を引て、ぎよなうのちやうちんとあるは魚綾の誤にて、綾をはりたる挑灯ならんといひしは、おしあてのひがごとなりき、古印本はぎよなうのちやうちんと假名にかけれど、後に古寫本を見れば、魚腦の燈爐とあり、これたしかなる證なり、灯爐とありては挑灯の證にはしがたしといふべけれど、上にいべるごとく、もと挑灯と灯爐はひとつ物なれば、古印本にちやうちんとあるも、後のさかしらにはあらざるべし、さて魚腦の挑灯といへるは、唐國の魚魷灯の事也。

提燈製作

〔萬金産業袋〕挑灯類 此條には箱と丸とのてうちんの一通井にはりの仕やう以圖注之

箱でうちん、圖なし、壹尺貳寸、壹ばん、壹尺壹寸五分、あいの物、壹尺壹寸、貳ばん、壹尺五分、三番九寸五分、八寸飛脚でうちん、小でうちん、七寸六寸、五寸、四寸、どうらん、かなでうちん、此類にいたりては、大キサ定まらず、あるひは角形なるもあり、紙は美濃紙にてはる也。

丸でうちん、大キサ極なし、どう、ほうづき、丸、たま子、あこだ、つばなり、馬でうちん、鯨の弓をからかさでうちん、四角、ほたる。

右の類このみに、またがふ、大キサ古代の寸法に定法もなし、箱でうちんには、釣、金物、棒同かな物いる、丸でうちんは、鏝にて割底にもする有、扱張おろしと、油ひき二品あり、但てうちんには、胡粉にて紋所を書て、そのうへに油をひく事あり、火うつりてよき物也、但油不引にもよし。